

明月記からみた定家

村 井 董 直

岡山理科大学教養部

(昭和62年 9月30日受理)

1. 明月記について

藤原定家は「明月記」という日記を遺している。現在あるものは、治承4年（1180）2月の記録からはじまって嘉禎元年（1235）12月30日までの約50数年間にわたる毎日の行動の記録で、定家19才から74才までの日記である。残念ながら長い年月の間に欠損した部分もかなり多くあり、それは年数に数えても18年間に及んでいる。だが、さいわいにも、彼が40才くらいまでの間の欠損年数が11年間に及んでいるのに対して50才を過ぎてからは完全に近いくらいの日記が多く遺されていることである。時には年次によってあるにはあるが、例えば建保6年（1218）の記をみると、正月は9日間、7月は5日間、8月は4日間、11月はわずか1日、全部あわせても19日間しかない年もある。

日記を書くということは、ただに定家ばかりではない。その代表的なものとしては、摂政関白の地位にあった藤原（九条）兼実が「玉葉」を遺しているように、多くの公卿たちはこぞって日記を書いている。そしてその多くは宮中などにおける諸儀式などの有職故実、典例などを克明に書き続けていることである。有職故実に通暁しているということは、当時あっては大きい財産であったにちがいない。兼好が「徒然草」で「ありたき事は」の中に「有職に公事の方」といっているように、朝廷の官職・制度・服装・殿舎などの知識に精通していることが必要であったのであろう。従って「明月記」もそれに関する記録は極めて多く、今日から見ると誠に退屈な日記といってよい。元来、公卿日記はそうした味気ないものだが、「明月記」には他と違った書き方をしている箇所がある。たとえば、事件があると、客観的記述にとどまらず、感想を書きとどめたり、四季の花々の移ろいについて、又、鳥などの記述などがあり、そこから彼の性格や美意識の変化などを知ることができる記述が多い。これは彼の和歌や歌論では語り尽くせない面を確実にわれわれに提供していることを知る。

しかしながら、定家一代の傑作といわれる

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

あぢきなくつらき嵐の声もうしなど夕暮に待ちならひけむ

これらの和歌は定家25才の時の作であるが、残念ながらその年の日記は全くない。

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別る横雲の空

を詠んだ建久9年は彼の37才の時であるが、その年の日記は正月、2月、12月の3月だけで、すべて有職故実に関する記事でうめつくされており、

駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

を詠んだ正治2年、彼は39才であったが、この年も又、見るべき記録は残されていない。これらの歌はいずれも新古今集に撰入された有名な彼の傑作といってよい。だが、その前後の彼の生活記録は求めようもない。ひるがえってこの時期をみると、彼は非現実的・唯美的な世界を詠むことによって、従来の和歌とはちがった新風をひらこうとして追求した最も熱心な時期に相当する。それは後日、新儀非抛達磨歌として多くの批判を受けらるるまでに至る。偶然にもその頃と、日記に見られる書き方、素材のとりあげ方の変化とが重なっているように思われる。彼の20代、30代にあっては、庭に咲く花樹について、あるいは寺や旧跡について、ほとんど顧みもしなかったのに、この頃からはそのことが数多く日記にみられるようになってくる。それは期を同じくして歌論の上からもいうことができる。

建仁元年(1201)、彼が40才の時の千五百番歌合に

故郷にひとりも月を見つるかな姨始山をなに思ひけむ、の判詞として、彼は「玄兎之影 極旧里之閑望 偏名所之遠情 心尤幽玄 足賞翫者歟」といつている。荒れずきんだ故郷(旧都)の月の夜の情景を姨始山の月を連想して懐旧の情にふけるといふこの和歌を定家は幽玄ということばを使って賞している。こういった境を評するような定家であったろうか。これはほんの一例にすぎないが、こうした内面的な美意識の変化を彼の日記から汲みとろうとするのが本論の目的である。

2 定家の生活

まず、論をすゝめていく補助として彼の経歴を簡単にふり返っておきたい。

定家は応保2年(1162)、左京大夫正四位下で顕広^{あきひろ}といっていた藤原俊成の二男として生まれている。母は若狭守藤原親忠女で、加賀とよばれ、近衛天皇の母后にあたる美福門院に仕えた人である。幼少の頃はよくわからないが、「明月記」の安貞元年(1227)11月11日の記に過去をふりかえって

予昔安元元年二月赤班 同三年三月之間皁 共如赴他界 皁瘡以後雖蘇生 諸根多欠 身体如無 其後五十年 存外寿考至干今 非尋常身

と書いている。安元元年(1175)といえは、定家14才の頃である。今でいう「はしか・

天然痘」を患ったことになる。大変な病気だったのだろう。その病根は根絶できなかったのか、治承5年（1181）4月16日の記では、

未時以後心神忽惱 温気如火 於今者更不惜身命 但病体太遣恨 前後不覚
とある。かなりの高熱である。そうした病弱の身でありながら源俊頼の歌学書「俊頼髓腦」を読みわが国の古代はいうまでもなく、中国の典籍にも通じていたらしく、治承5年（1181）正月14日の記に

新院己崩御 依庭訓不快日来不出仕 今聞此事 心肝如摧 文王己没 嗟乎悲矣 情思之世運之尽歟

とあるように、高倉院の崩御を中国の文王になぞらえて書いている。ついでながらいえば庭訓とは父俊成の教えのことで、あるいは病弱ゆえ俊成は外出を禁止していたのかもしれない。それにしても院の死を世運尽きるかと受けとめていることにいささか勢が過ぎはしないかと思う。ともあれ、周囲悉く平家一門にとりまかれている高倉院に対しての表現と思えば、定家は平家方とはかなり親密な関係にあったと考えられる。24才の侍従の時、五節の舞の夜、右少将源雅行に嘲弄されたことを怒って脂燭で彼を打つという行動に出て除籍処分にあっている。文治元年（1185）11月22日のことである。その許しは翌2年3月まで待たねばならなかった。その頃から九条家の家司として御曹司良経やその叔父慈円に近づき、歌道も一層の磨きがか、ってきたようである。ちょうどその頃だったろう。文治2年（1186）、出家している西行から定家らに百首歌勸進の呼びかけをうけ二見浦百首を詠じた。前節で示した一代の傑作「見わたせば」の和歌はその中にある。そうしてまもなく西行から「宮河歌合」の加判を依頼されることとなる。こえて文治5年（1189）11月13日左近少将に任ぜられたが、その頃から定家及びそれに同調する一派に対して、その新風和歌を新儀非扱達磨歌として批難されるに至る。それと同じくして権勢を誇った九条家も、建久7年（1196）の政変ともいべき事件により九条兼実も失格し、権勢・名聞の権化ともいわれる源通親の世を迎えることとなる。従って定家も高倉・安德・後鳥羽の三世にわたって許されていた昇殿も停止される破目にあう。その心境は拾遺愚草に

建久八年 秋歌あまたよみける中に

ながめつつ思ひしことのかずかずにむなしき空の秋の夜の月

によって理解されよう。私は「思ひしこと」の内容はやはり和歌に対する新風であり、それが「むなし」になったものと解釈したい。建久9年（1198）1月11日、後鳥羽天皇も土御門天皇に譲位して院政をしき、その前後に関東の頼朝の死（1199）もあり、九条家にも漸く春がめぐってきた。歌壇史上の建保期の到来である。建仁元年（1201）7月に和歌所が設置され、定家もその一人として勅撰集撰進の院宣を受けている。そして元

久2年(1205)3月26日、撰進したのが新古今和歌集である。その功を見ずして定家は父俊成を失っている。元久元年(1204)11月30日91才の生涯であった。時に定家43才であった。その頃から定家と後鳥羽院との間に和歌に関する微妙な考え方の相違が見られ、それは最後まで修正されることはなかった。ついで承元3年(1209)の頃、3代将軍源実朝から和歌の批評を依頼される。定家にとっては、よほど嬉しかったのだろう。その前年7月の除目に定家は失敗し、その心境を「明月記」の承元2年(1208)7月10日に「官途と云ひ世路と云ひ一分の恩拳なし」とも「只前世の宿運なり」と歎いていた頃だったから、実朝からの書状は格別に嬉しかったにちがいない。それを契機として「詠歌口伝」「近代秀歌」を書き続けたが、定家にとっては思いもかけないことがあった。実朝の死である。だが、「明月記」にはその時の日記はない。痛恨の極みだったろう。時に承久元年(1219)1月27日であった。加えて承久3年(1221)、承久の乱が起こり、後鳥羽院は隠岐へ流された。定家は歌道について考え方の修復もなく永久の別れとなってしまった。一方、定家の私生活は依然として貧困であつたらしく、寛喜2年(1230)10月13日に

今日使家僕堀棄前栽為麦壠 雖少分為支凶年之飢也莫嘲 貧老有他計哉

とあるように、凶年の心配の為に前栽の木を掘りすてて麦を植えている。貧老の者にとりこれしか方法はないのだといふ、同じき20日には、

巳時許禪尼令參詣社頭 老屈微運之身 神道仏堺倦干今生之祈請 然而依年来之余執 今日令參詣

と、自分の中納言昇進の夢を願って、禪尼(定家の妻)を先祖代々信仰している坂本の日吉大社に祈願のため参詣させている。老屈微運といふ、年来之余執といふ、なみなみならぬ執着心を汲みとることができる。定家この年69才であった。その効あつてか、貞永元年(1232)に権中納言に任ぜられた。時に71才、けたはずれに遅い昇進ではあった。その年6月には9番目の勅撰集撰進の命を受け、10月には「新勅撰集」の仮名序と20巻の目録のみが奏覧され、以後、彼のもとで選歌が進められた。ところが、御下命をされた後堀河院が崩御されたので、絶望のあまり、選歌の草稿本を悉く焼却してしまった。定家の面目躍如たるものがある。しかし、彼の周囲の者が別の下書を探し出し、再び定家に補修を依頼して出来あがったのが、「新勅撰和歌集」である。その間の天福元年(1233)出家して沙弥明静となったことは、「明月記」の同年10月11日の記に明らかである。もともと定家は二条京極邸を住居としていたが、承元元年(1207)46才の時、閑居の地を嵯峨に求め、しばしばそこに行っていた。嘉禎元年(1235)5月27日の記に

予本自不知書文字事 嵯峨中院障子色紙形故予可書由彼入道懇切 雖極見苦事ナマジ
イニ染筆送之 古来人歌各一首 自天智天皇以来及家隆雅経

とある。入道とは宇都宮頼綱のことで定家の嫡男為家の妻の父にあたる。嵯峨中院はその人の別荘である。この障子にはる色紙の揮毫を依頼されたので、天智天皇から家隆・雅経に至るまでの百人の秀歌を書いたということである。これが小倉色紙であり、のちの小倉百人一首の起りともなっている。そうして「明月記」はこの年で終る。定家はその後6年を経て、仁治2年（1241）8月20日、波乱の人生を終えた。時に年80才であった。

3 定家と花樹

次に「明月記」の記事にうつる。

「明月記」

治承4年（1180）2月14日に

明月無片雲 庭梅盛開 芬芳四散 家中無人 一身徘徊 更出南方見梅花之間

とある。皎々と照る明月のもと、誰もいない庭を歩きひとり梅の香りを楽しんでいる。

（定家19才）

建久9年（1198）1月26日に

昏後風雨 不出門向旧記 及晩景無人音信病氣又不快 徒然更難消懷旧之思 思外無他唱 然而嘆耳

とある。夕方になって風吹き雨降る。外に出ないで書に向かい、晩くなって人もいない。つれづれなるままにあれこれ思いをめぐらすと、昔がたまらなく懐しく思われわが身を嘆くばかりである。（定家37才）

正治2年（1200）11月11日に

天明後帰洛 路次雪甚以有興 江湖関山景気長途催興

とある。夜があけたころ京都に帰る。日吉大社よりの帰途、雪が多くて中々一興だった。琵琶湖のながめも逢坂山のそれも興を催すものがあつた。（定家39才）

建仁2年（1202）8月19日に

早旦向嵯峨 草花開敷 眺望催興

とある。朝早く嵯峨に行く。草花は咲き乱れて興味又格別である。定家にとってこの嵯峨の地は気に入ったのだろう、この年から5年後にこの地に閑居の家をもつた。（定家40才）

建仁3年（1203）7月7日に

自季夏在有馬湯屋 今朝遷坐此山上人湯屋 此处地形尤幽也 对高山望遠水

とある。夏の終りから有馬温泉にきている。今朝は山の湯屋にうつる。四方を見回わすと地形まことに幽、高山に対し、遠くまで川の流が見渡せる。（定家42才）

元久元年（1204）3月11日に

入法勝寺見花 月朧々

とある。法勝寺には行って花を見る。花は満開で、おぼろ月が空にかゝっている。夢のような風景。（定家43才）

以上の記事は、定家が花樹を見た時にその感想をどのように日記に書いているか、いかえれば自然に対する定家の美意識がどういう対象に向けられているかを紹介したものである。もう一つは病弱な定家が病に悩んでいる時、どういう心境であるかを日記から引用したものである。勿論この外にもそれに類する記事はある。「近日花盛」（治承4年3月4日定家19才）、「見藤花」（同年3月30日）、「令栽萩簿等」（正治元年4月1日定家38才）、「天晴 雖向最勝光院見花 時桜未開 仍空帰」（正治2年閏2月15日定家39才）、「紅葉翻風」（建仁元年10月15日定家40才）、「近日桜花盛也 今年花甚遅梅及二月晦開 遅梅猶盛也」（建仁2年3月15日定家41才）などがそれである。ただ、前述したように、この頃の日記は欠損が多く、その全貌を知ることのできない憾みはある。しかし、以後の日記と比較して、当然書かれていて不自然とも思われない時期に何も言及していないことは確かである。

ところが、定家45才くらいから花樹に対して変化のあることを知る。

建永元年（1206）5月12日に

新月明 依懐旧之思 参中御門殿 望前庭月 独霑襟 閑居寂寥 遠隔慈悲之恩容 恋慕之思 難堪忍

とある。亡くなった藤原良経の邸に参って月を眺めてひとり涙を流し、恋慕の思いの堪え難きを記す。（定家45才）

承元元年（1207）3月9日に

天晴 私向嵯峨 為見庭樹花也 自栽樹漸長 見其花養志 夕帰

嵯峨には定家の山荘がある。庭樹を見に行ったのだろうが、自分の志を養うとある。今までになかった書き方である。又、ここでは本文を示さないが、この月の12日、再び亡き良経の邸を訪ねて、「見泉石懐旧涙千万行」とも記している。（定家46）

建暦2年（1212）9月25日に

十首歌依召進内裏 老骨之後詠歌太難堪（定家51才）

建保元年（1213）9月13日に

有当座歌 予風情已尽了 非歌体 鶏鳴退出 心神失度 太無益道也（定家52才）

建保3年（1215）9月29日に

清範朝臣奉書 給百首題 年内可詠進云云 連連三百首 争得風流哉 太以難堪（定家54才）

とある。これらは花樹とは関係はないが、定家はもう和歌に倦んでいたのだろうか。「予の風情は尽き終んぬ」といふ、作歌を「はなはだ、堪え難し」とも、「はなはだ、無益の道なり」ともいっている。一応は花樹とは無関係のようであるが、切り離すわけにもいかない。ともあれ、定家の花樹を見る姿勢は、

嘉禄2年(1226)10月21日に

近日只堀栽庭樹 僅養心神(定家65才)

とも、寛喜2年(1230)2月18日に、

天晴陰 所栽之梅下枝南庭北庭 桜南庭 三各開始 以之養眼(定家69才)

とも、寛喜3年(1231)8月10日に、

萩花盛開 毎朝槿花養眼(定家70才)

ともあり、定家が花を見たり、花樹を栽えたりすることは、志を養い、心神を養い、眼を養うことも一つであることがわかる。心を養うとは対象に美を見出だしていることである。咲き始め、落ち尽くしたあと、かならずしも全盛の時とは限らない。また、

寛喜3年(1231)正月25日に、

天晴和暖 自昏雨降 終夜如沃 堀東白梅盛開 堀棄南庭西柳 其跡栽西庭八重桜 閑人只以之支徒然(定家70才)

とある。庭の樹を植えかえることは日記の随所に見える。それは徒然を支えるためであることがわかる。また、

天福元年(1233)正月8日に、

念誦日入以後休息 夜月明 遠近堂舎鼓音聞 近日尊卑家々猿楽握翫 積山岳湛淮泗 云云 独醒叟不視舞 不聴歌 又無琴詩酒之友 只对早梅之花樹 慰憂鬱之懷(定家72才)

とある。尊きも卑しきも猿楽に打ち興じ、ご馳走や引出物を山のように積み、中国の淮水や泗水のように満々と杯に酒をたゝえていても、自分は屈原のように、この老翁は、舞を見ず、歌を聴かず、早咲きの梅に対して身の憂鬱を慰めているとある。以上のことから次のようなことが考えられる。定家が花を見たり、花樹を移植したりすることは、志を養うことが一つ、徒然を支えることが一つ、そして憂鬱を慰めることが一つ、この三つが大きい支柱をなしている。もっとも人は老年になるにつれて花に眼を向けがちであるから、定家も普通の年のとり方をしているに過ぎないではないかという反論もできるだろうが、私は定家にとっては、前述のように作歌に倦んでいたこと、もう一つは新儀非拠達磨歌と一派が批難されたこととを考えねばならないと思う。そうしたことが重なった上でのことと思うのである。そして、こうした日記は建保以前にはなかったことであり、建暦2年、彼が51才の頃から徐々にふえはじめている。一一書いていくことは

煩わしいので、建暦2年の記事を紹介し、その後はとくに目立ったものだけを記すこととする。

建暦2年(1212) 定家51才

- 1 / 10 朧月和風始有春気
- 2 / 4 所残柳又依有艶気
- 2 / 16 庭梅漸落 桜花初開
- 2 / 17 花僅開
- 2 / 19 行向嵯峨 見花夕帰
- 2 / 22 参詣日吉 路次花盛也
- 2 / 27 今日欵冬(筆者注山ぶき) 已開 未見二月此花開
- 6 / 17 涼気如秋

以上である。年間を通じては少ないようだが、前年まではこの種の記事はほとんど皆無であったことを思えば大きい違いというべきだろう。ついで年毎の目立ったものを記すこととする。重複は出来るだけ避ける。

建保元年(1213) 定家52才

- 5 / 19 郭公数声
- 閏9 / 28 依徒然 植庭樹
- 10 / 9 堀鷄冠木(筆者注かえで) 一本帰
- 12 / 16 籬下長春花(筆者注きんせんか) 猶有紅葉 此間鶯舌頻歌 早速先春歟 又白梅間開

嘉禄元年(1225) 定家64才

- 1 / 27 近日白梅単紅梅盛開
- 2 / 15 桜早花一両開 梅花未落
- 2 / 30 後曙鶯啼
- 10 / 29 木葉落黄 菊花悉枯

嘉禄2年(1226) 定家65才

- 1 / 7 自旧年鶯舌頻歌
- 3 / 23 梨桃花落尽 欵冬盛開
- 4 / 20 雨後郭公初声

安貞元年(1227) 定家66才

- 2 / 13 橘下枝 浜松三本 各栽畢
- 3 / 24 桧木二本棕櫚一本同堀渡之
- 閏3 / 11 分栽菊

- 4 / 14 昨今聞蟬声
 8 / 21 萩薄之盛也
 9 / 23 鶏冠木未及半 僅染始 桜櫃悉紅
 10 / 7 残菊漸衰
 寛喜元年 (1229) 定家68才
 8 / 18 此三四日鶺鴒来鳴 炎暑雖如盛夏 時節自至歟
 寛喜2年 (1230) 定家69才
 閏1 / 24 垂柳漸緑
 3 / 7 八重桜花漸開 永日徒然
 4 / 12 清定朝臣持来八重躑躅
 5 / 19 桔梗花初開
 5 / 27 黄梅漸落尽
 11 / 25 郭公頻鳴
 12 / 26 黄鶯已囀 白梅僅開
 寛喜3年 (1231) 定家70才
 2 / 26 終日寂寥 只対紅梅与翠柳
 8 / 10 毎朝槿花養眼
 9 / 6 初雁声聞
 天福元年 (1233) 定家72才
 3 / 8 牡丹盛開
 文暦元年 (1234) 定家73才
 7 / 14 槿花初開 女郎已盛 萩一両枝僅開
 嘉禎元年 (1235) 定家74才
 3 / 1 紅梅二本盛開 蝶来飛
 4 / 3 梨花帶雨散
 5 / 22 瞿麦 (筆者注なでしこ) 十五日始開
 閏6 / 25 蟬声満庭樹
 6 / 8 庭樹林檎入籠 (進) 皇嘉門院

(例えば寛喜3年8月19日の記によると定家は春日大社に参詣している。京より奈良への途次、芋・我毛加宇われもかう・苺萱・蘭・女郎花などが咲き乱れていることが記されており、奈良での一夜は終夜、鹿の声を聞いたことが記されている。これらは一過性のことゆえ省略した。)

以上、重複をさけて、できるだけ初出のものに限って示した。定家は随分、各種の花

樹を植えているし、梨とか林檎とかを贈り物などにしている。又、花の満開の記事も多いが、菊花だけは例外で、枯れたとか、落ちたとかの記述になっている。あるいは、作歌の素材としての花樹に限らない。鶏冠木・櫨・長春花・鶴鴿などがある。ともかく、彼が50才を過ぎてから格別に多く記されている。ただ、そればかりではない。

嘉禄元年（1225）2月29日に、（定家64才）

天快晴 暑初催 雞鳴以後帰洛 於山階日出 往還之間 社頭路次 花盛之最中也
 田夫樵夫悉挿一枝 桃李浅深又満望 過白河辺 只有懐旧之思 昔与旧遊翫花之所
 時移事去 花猶每春不回 古木折尽堂宇滅亡新豊遺民只有一身 依恐暮齡之身不能眺望
 望 帰慮

とある。この記は、前日の28日、御子左家が代々信仰してきた大津坂本にある日吉大社に参詣の折、病床の慈円を見舞ったりして、翌日の帰京のさまを記したものである。卑賤の者は花一枝、頭にかざしてわがもの顔に楽しんでいる。花盛りの風情が懐旧の思いを誘う。かつて友と遊んだ所も、古木折れ堂宇滅亡し悲しみのあまり眺めることもできないと記している。

（新豊の遺民とは、白楽天の長詩に出てくる老人のことで、ここでは定家自身のことをいっている。）

この頃、定家は懐旧の思いにひたる。同じ年の11月11日にも、

今日故左相局御遠忌也 依懐旧之思 参八条旧跡之間鎖門無人跡 八条院御所東己為
 民家 築垣之内或麦畑或小屋 南山古松僅残 窮老之病眼 哀慟之思難禁

と記している。故左相局が誰であるかは不詳である。八条の旧跡は暲子内親王の旧跡である。そこは麦畑になったり、小屋が建っていたり、古松だけが残っている。それを見て哀慟の思いを禁ずることができないと記している。かくて懐旧の情は度重ねて定家を襲う。定家自身もその思いを自覚していたのであろう。同じ年の同じ月の20日の記にも「愁歎と老病と身を責め心を摧き、いたずらに往事を思う」と記している。「身を責める」とは何を意味するのだろうか。

寛喜元年（1229）3月6日に、（定家68才）

巳時許竊入歡喜光院 往年花樹之跡 一株古木不残 堂宇傾毀 不能昇見 徒寄数多
 之民煙 不知大破仏閣悲痛無極 次入殿下御領故三位中将旧蹟 適見古木之花 三十六
 年之昔 訪亭主之病之後 今又初臨此所彼是懐旧之思難禁

文中、故三位中将とあるのは故藤原公衡のことである。歡喜光院を見ては一株の古木すらなく、仏閣も大破した様に悲痛の念を催おし、公衡の旧跡に対しては36年の昔を偲び懐旧の思いをする。

こうした懐旧の思いを掘りさげてみると、定家はただに感傷にひたるだけではなく、

もっとその深奥にくだりこんでいるように思われる。それは

寛喜2年(1230)5月27日に、(定家69才)

遙漢清明 黄梅漸落尽 云花云実 只見盛衰

と記されているのに尽きるのではなからうか。花を愛し、花に執着し、それ故に世相の変転をもすべて盛衰の相において理解しようとする態度ではないか。花の盛衰の過程に世の無常なる相を感得していたのではないか。もっとも、彼は「無常」という語を年少の頃から使ってはいる。。治承5年(1181)閏2月3日に、(定家20才)

与公衡侍従於閑所清談 是只無常悲也

とある。しかし、前月の2月29日にも御法事の記事があり、それから3日おいての仏事である。前者は「随催勤之」とあって、や、傍観者的立場の記述である。それに比べると3日の御仏事はかなりの仏事であったらしく、無常の悲しみをいただいたのであろうが、今、私を取りあげている「無常」とは次元の違いがあると考えられる。

このように考えてみると、確かに定家は50才前後を一つの境として花樹に対する記述の仕方が大きく変わっているといわざるを得ない。

4 拾遺愚草と花樹

前章で述べたことは、彼の作歌の上からもいうことがきる。例えば拾遺愚草をみることにする。定家32才の時の建久4年(1193)秋の歌合百首の題を考える。これは「三年給題 今年雖憚身依別儀 猶被召此歌」とあり、定家が権少将の時である。それによると給題ではあるが、余寒・若草・春曙・残春・夏草・夏衣・野分・秋夕・暮秋・落葉・枯野と続き従来のそれと大きい違いはない。これに対して定家54才の建保3年(1215)9月13日の内大臣家百首では庭梅・夜梅・栽花・待花・翫花・古郷橘・古寺紅葉・深更霞と続いている。これらは「明月記」に記されたままの和歌といってよい。二三の例をあげる。

袖ふれし宿のかたみの梅が枝に残る匂よ春をあらすな(庭梅)

定家はしばしば庭を歩いて白梅や紅梅の咲き具合や匂いを観察し、それによって故人を偲んでいる。実体験そのものが歌われている。

ふりはつる身にこそまたね桜花植ゑおく宿の春なわすれそ(栽花)

定家は心寂房という僧に依頼して庭守とか木守とかの仕事をかまかしていたようである。日記にも「草樹の事は只この僧の進止に随う」(寛喜2年2月25日)とある。よほど信頼していたのだろう。心寂房のいない時は定家自身でよく植えかえている。この和歌などはまさしく定家の生活と思う。

かざしをる花の色香にうつろひてけふのこよひにあかぬもろ人(翫花)

定家は50才を過ぎてからは毎年のように鞍馬の毘沙門堂に花を見にいっている。田夫樵夫が一枝を頭にかざして楽しんでいることはすでに述べた。まさに実景である。

そばだつる枕に落つる鐘の音も紅葉を出づる峰の山寺（古寺紅葉）

定家が頻繁に旧跡旧寺を訪ねたことはすでに述べた。この和歌もそうした体験からのものとみられる。ここに二三の和歌を出して建保ころの詠み方が生活を通して体験的、生活的、現実的に近づいているかを述べた。いうまでもなく若き定家は、実体験からは自立したところにおいてこそ和歌の自立性があると考えていたはずである。言い換えれば観念的な題詠歌、構想歌と言ってよいだろう。彼が日記に逐一花樹の推移を書きはじめたということは、ありのままの自然を凝視しはじめたからに外ならない。「ことば」をいたわり、いたわることの姿勢の行きつくところは観念の世界において「ことば」をもて遊ぶことにならざるをえない。それは「宮河歌合」にても理解することができる。これは定家28才の時、西行がこれに判詞を請うた。西行にとっては、自然に対して極めて率直な、自由な歌の中に抒情性豊かな歌群として大きい自信をもっていたことだろう。それに対して定家は

この世とおき、こむ世といへる、ひとへに風情を先として、詞をいたはらず見え侍れど、かやうの難は、この歌合にとりては、すべてあるまじきことに侍ればと書き入れた。つまり、西行とは全く異質の存在であることを示した。「ことば」をいたわらない、ありのままの自然を歌う西行と、ぎりぎりまで「ことば」をいたわる定家との違いをみることができる。かくして若き定家には多くの支持者を得る結果になったが、その支持者たちに対する批難はやがておこってくる。

おぼつかなく心こもりて詠まんとするほどに、果てには自らも心得ず、たがはぬ無心所着になりぬ。かやうの歌は幽玄の境にはあらず、げに達磨宗ともこれをぞいふべき。

（無名抄）

という結果をみる。世にいう新儀非拠達磨歌である。私は定家の支持者達に浴びせられた批難がおこり始めた時期と、定家その日記に花樹のことを書き始めた時期とが、そして又、定家が作歌に倦みはじめた時期とが互いに重なり合っているのではないかと思う。

5 定家の趣向

承元2年（1208）9月27日に、（定家46才）

天晴 夜半許西方有火 望之煙甚細高 朱雀門焼亡云云 末代滅亡 慟哭有余

とある。この日、朱雀門が焼けた。定家は「末代滅亡」といっている。翌日、その詳報として

伝聞 常陸介朝俊 取松明昇門取鳩 帰去之間件火成此災 近年天子上皇皆好鳩給
長房卿保教等本自養鳩 得時而馳走 登旧塔鐘楼求取鳩 此事遂以滅社稷 嗟乎悲哉
例幣日見大宮大路 只有灰燼之跡 無人家京洛磨滅尤奇驚事也 是又非鳩一事 只国
家之衰微歟

と記している。朱雀門が焼けたことは確かに事件だっただろう。当時、養鳩が流行していた。人々はあちこちに馳走（走りまわる）した。たまたま朱雀門に鳩が巣くっているところから松明をともして登楼し、その火が原因で焼けたということである。しかし、朱雀門焼失が「社稷を滅ぼす」「国家の衰微」「末代滅亡」とまでに価することだろうか。こればかりではない。

建暦2年(1212)9月26日に、(定家51才)

人々追々貢物云云 天下貴賤競當南山 国家衰弊又在此事
とあるように賄賂が横行することにも直ちに「国家の衰弊」という語が出てくる。定家にとっては公卿たちの非行は悉く社稷滅亡に直結する。事大にして公憤の心の持主だったのだろうか。こうした表現は定家の若き頃にさかのぼる。有名な治承4年(1180)9月、定家19才時の

世上乱逆追討雖滿耳不注之 紅旗征戎非吾事

がある。「戦場に出て敵を征するようなことは武士のなすべきことであって私たちとは無関係である。従って戦については何も書かない。」という意であるが、これをめぐって定家を現実逃避の態度だとし、あるいはひややかに世相をながめている態度だとし、又、争乱にまきこまれることを極度に怖れた態度だと、種々解釈されている。私は「明月記」全体からこれを見なくてはならないと思う。「何も書かない」としながらも、その年の11月7日には維盛が坂東より逃げ帰り清盛の逆鱗にふれたことを書き、翌5年12月29日の記には重衡が南都に兵を進め東大寺、興福寺を焼亡せしめた記事を書き、しかも定家の所感としてこの愚行を「弾指すべし」と言っている。現実から逃避しよう、戦乱に巻きこまれまい、こうした考えは定家には微塵もなかったのではないか。この戦乱から33年を経た建保元年(1213)5月9日の記に関東の勝事(できごと)として和田義盛が将軍実朝を襲った様子を詳細に書き、その最終部分に

樂尽悲来是天罰歟 竊思之天下又無聊歟 末代貧者定及餓死歟 嗟乎悲哉

と記している。関東の戦を知った定家にとって、33年前の治承の戦を想起したのではないか。「天下又無聊」とある。戦そのものを天罰と受けとめ、無聊の世を将来せしめる。これは定家にとって堪え難いことではなかったか。定家は前述のように、度重ねて厳しい語で世相を評しているが、それはとりも直さず自己に厳しい、妥協のない性格であったろうと考える。定家は何事につけても常に来るべき先の先を見すえていた。それは歌

道においても世相においてもである。治承の昔、源平相闘う結末を、どのようになるかを知っていたが故に、一一細かく書くに堪えられなかったのではないか。一国の権勢の座にいた清盛の死を定家は淡々と事実だけを記している。

治承5年(1181)閏2月4日に

雨降 巷説 禅門太相国不予云々

こえて翌2月5日に

天晴 去夜戌時入道前太政大臣已薨之由 自所所自有其告 或云 臨終動熱悶絶之由
巷説云々

これだけである。おそらく、楽しみ尽き、悲しみ来る、これ天罰という感慨が脳裏に去来したことだろう。以上のことから考えると、定家にとって、たとえ小さな非行であっても、それはすべて「国家の滅亡」に連なり、「社稷を滅ぼす」ことに連なる。そして非行者に下される不幸は「天罰」に外ならない。この事を充分によむことができていたがために敢えて「不注之」といったのではないか。外からの圧迫を怖れてこのように書いたのではなく、自己に対する厳しさ故に、こう書かざるをえなかったと思われる。誰にも見せることのない日記の記事である。ここを出発点として考えねばならない。

私は「明月記」を通して定家の人間像を追ってみた。なかんずく、彼の花樹に対する関心を追ってみた。日記には欠損部分が多いとはいえ、その趣好は日記より十分に汲み取ることができる。その趣好と彼の歌論、作歌とは軌を一にしているのではなかろうか。

An Approach To Teika Through His "Meigetsu-ki"

Tadanao MURAI

*Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1 Okayama 700, JAPAN*

(Received September 30, 1987)

There can be no doubt that Teika is one of the most distinguished figures in the history of waka or Japanese poetry. Most of his superb wakas were written between the ages of about 20 and 40, while from the year when he was a little past 40 to the year when he died at the age of 80, he couldn't compose any wakas deserving special mention. Is there any reason why that is the case?

Fortunately he has left a diary entitled "Meigetsu-ki", which contains the dairy records of his life and thoughts between the ages of 19 and 74. It is a matter for regret that a lot of the earlier records before he was 46 are missing. Reading the diary scrupulously I came to recognize the fact that his description in his diary had gradually changed after he was 48. He had begun to assume a new mental attitude, facing up to the harsh realities of life. And at the same time his verse making activities had noticeably become dull. He even confessed that making wakas was quite a torture to him.

In order to infer the reason why his description made such a change, I followed up his attitude toward those flowering trees in his diary such as ume trees, cherry trees and others. Thus I have drawn something like a conclusion about what influence this change had on his waka making activities.